

グランドセイコーが刻む  
「時のモノ語り」 第一回



## 人生の持ち時間

作家 矢島裕紀彦

たとえば名人戦七番勝負。対局する棋士には、それぞれ一局につき九時間の持ち時間が与えられる。読みに没入しそれを使い切れれば、あとは一手一分以内で指さねばならず、秒読みの声が響く。

この時計を買ったのは王将戦の前だ。老棋士は言った。不惑を過ぎ、これが最後のチャンスということは自覚していた。ここで勝ち切らねば、棋士としてついに無冠で終わる。だからこの時計さ。水晶振動子が一秒間に三万二千七百六十八回振り動かされるといふその正確性が何より痛快だし、正直、裏蓋の獅子のエンブレムも気に入った。強そうじゃないか。

王将戦七番勝負は三対三ともつれた。最終局の前に、俺は久しぶりに爺さんの墓参りをしたよ。俺に将棋を覚えてくれた爺さんだ。田舎だからタクシーなんてない。駅からバスに揺られていく。帰り際、坊さんと会って話し込んでたら知らぬ間に夕暮れが迫っていた。バス停に戻ったが、薄暗がりですぐ古びた時刻表の文字は見えやしない。無意識に袖をまくって腕時計に目をやると、驚いたことにその文字盤がちゃんと読み取れたんだ。まる